

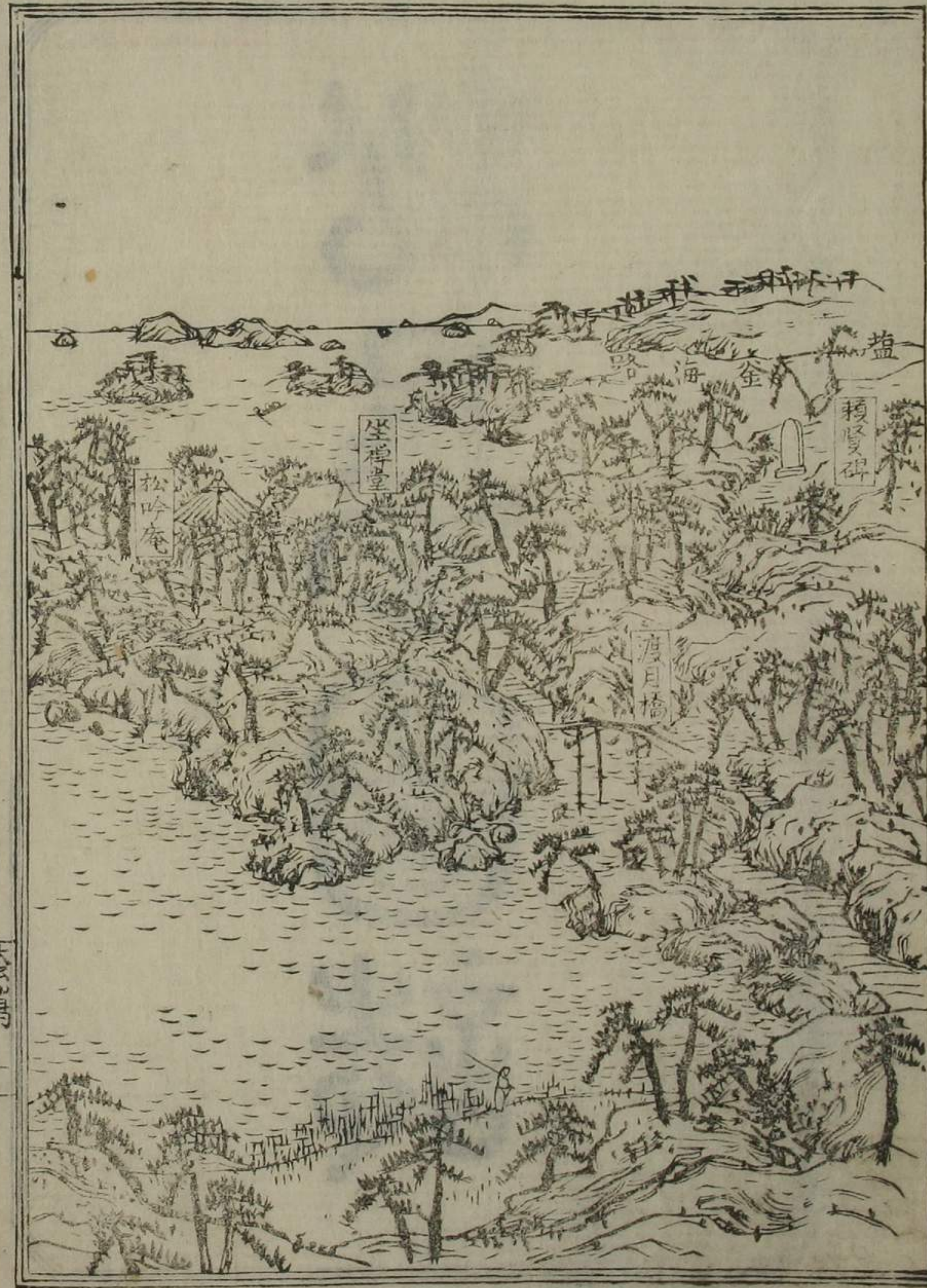
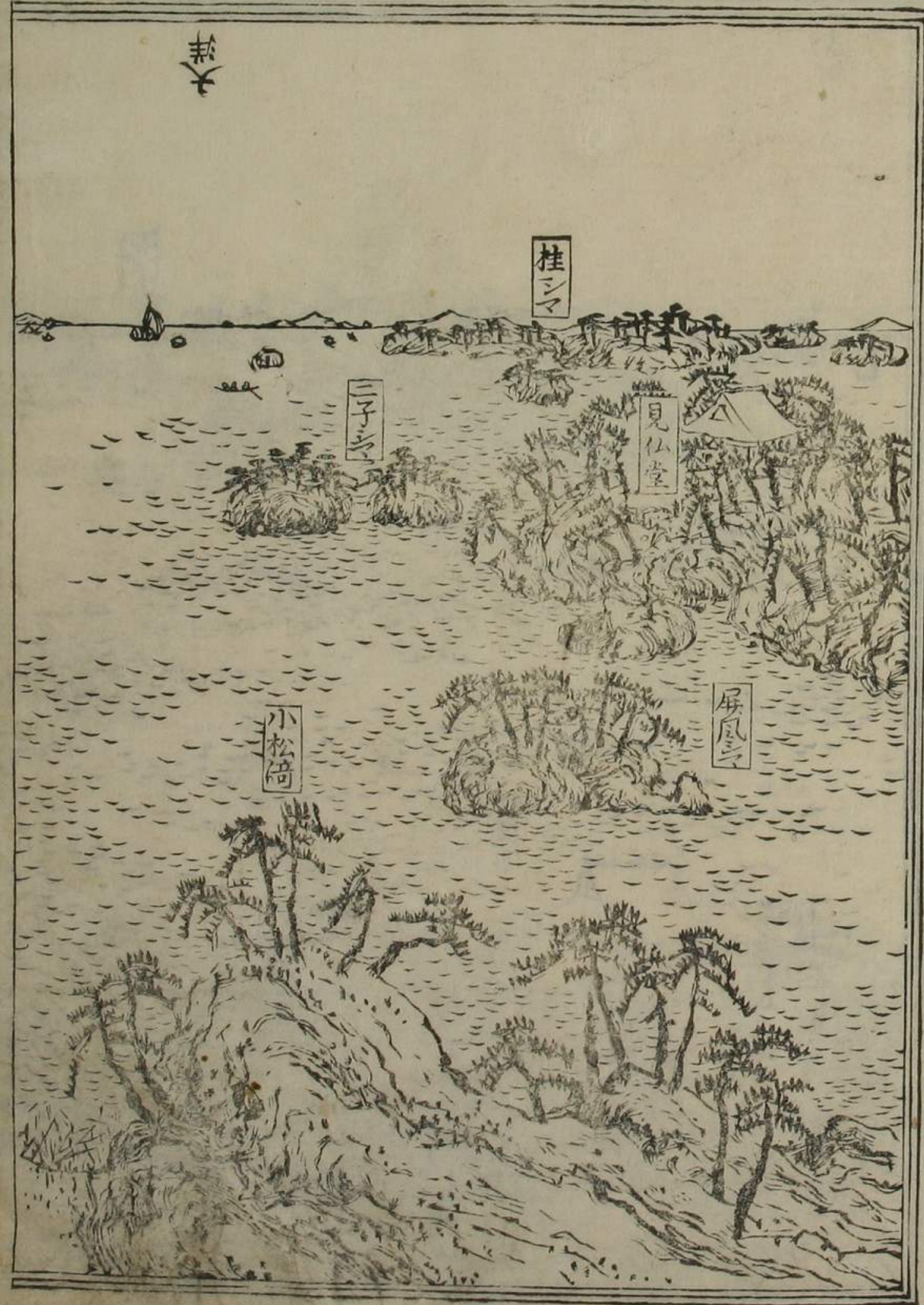




松尾圖經

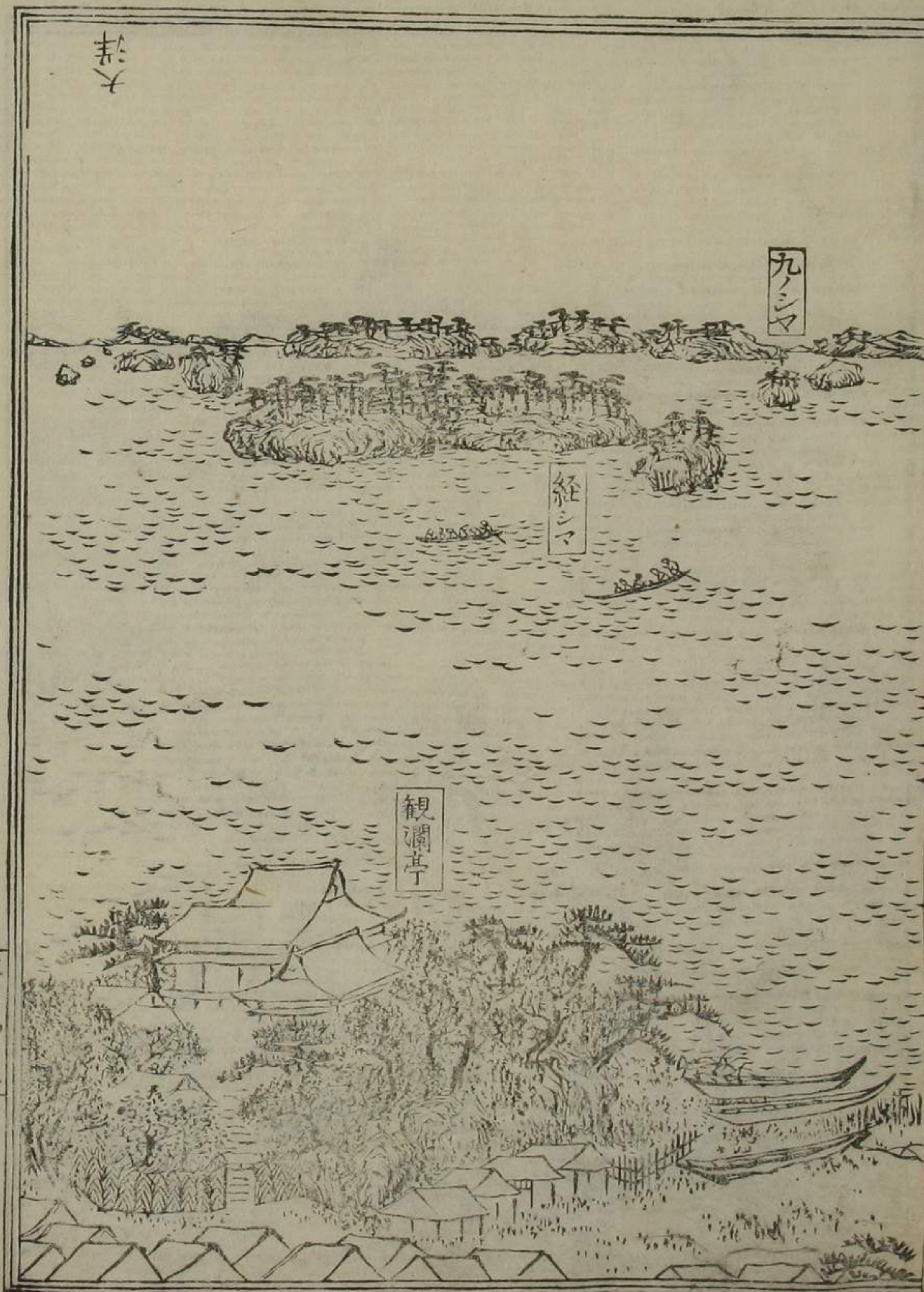
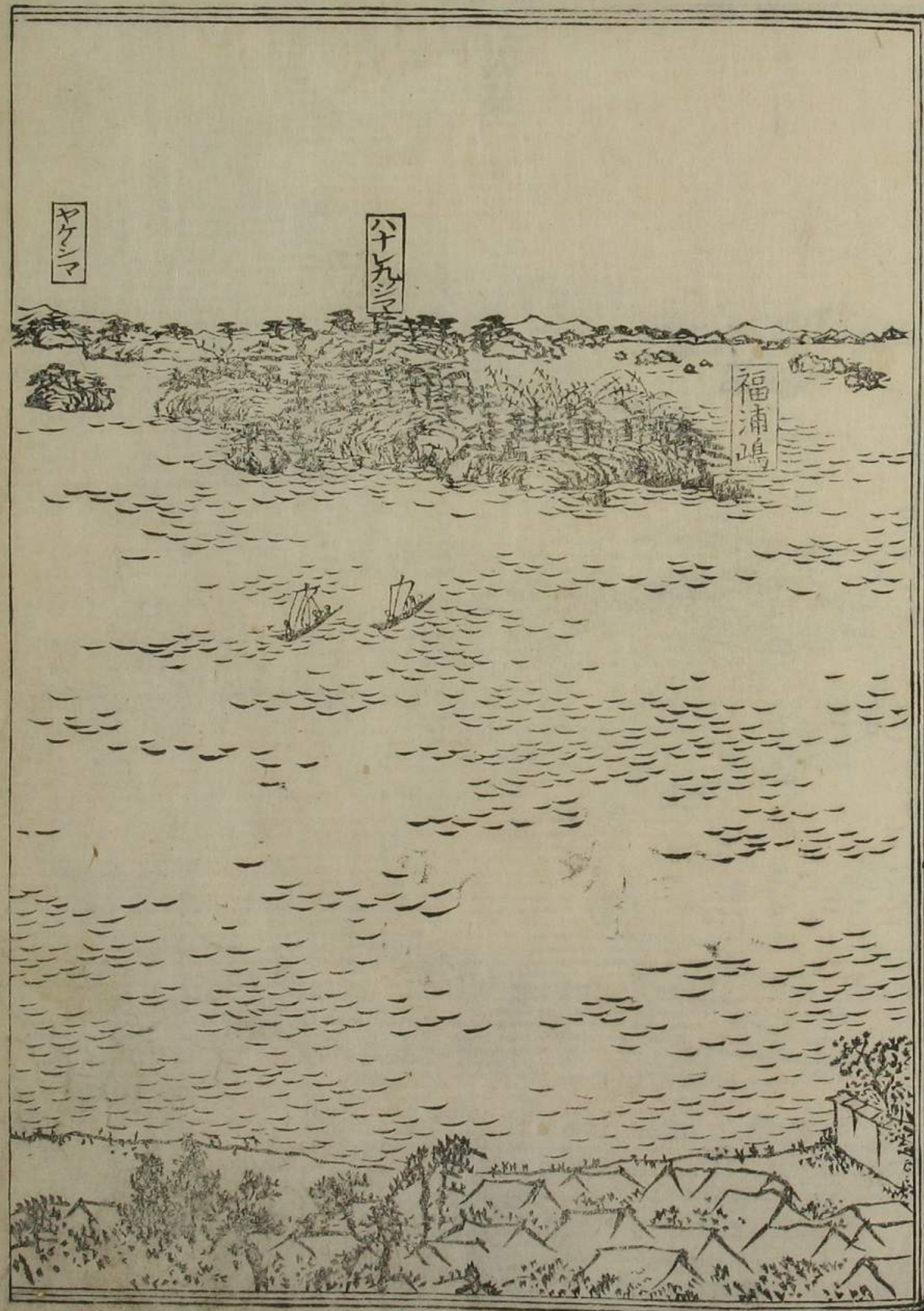
四 128 4  
1786  
卷



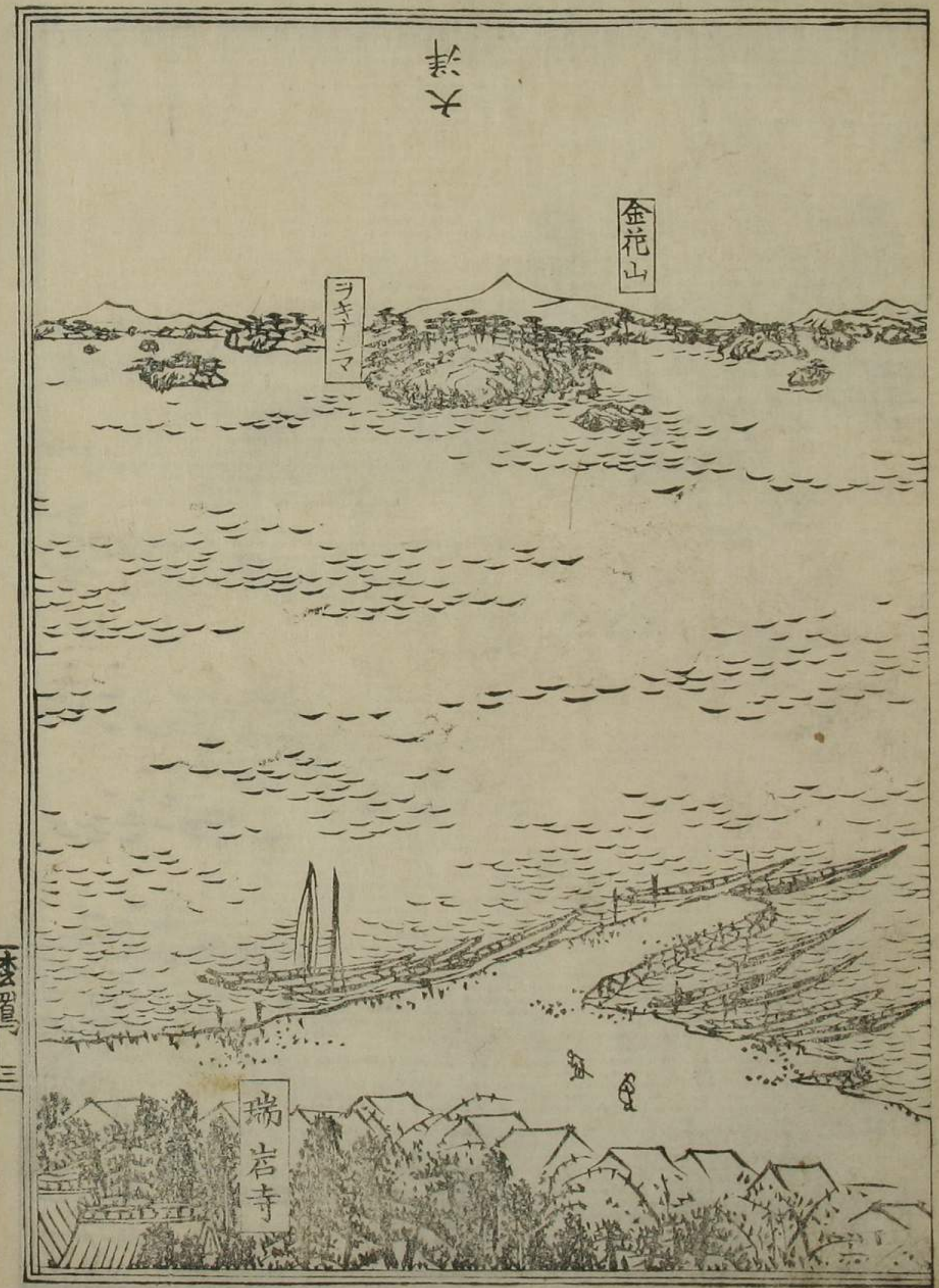
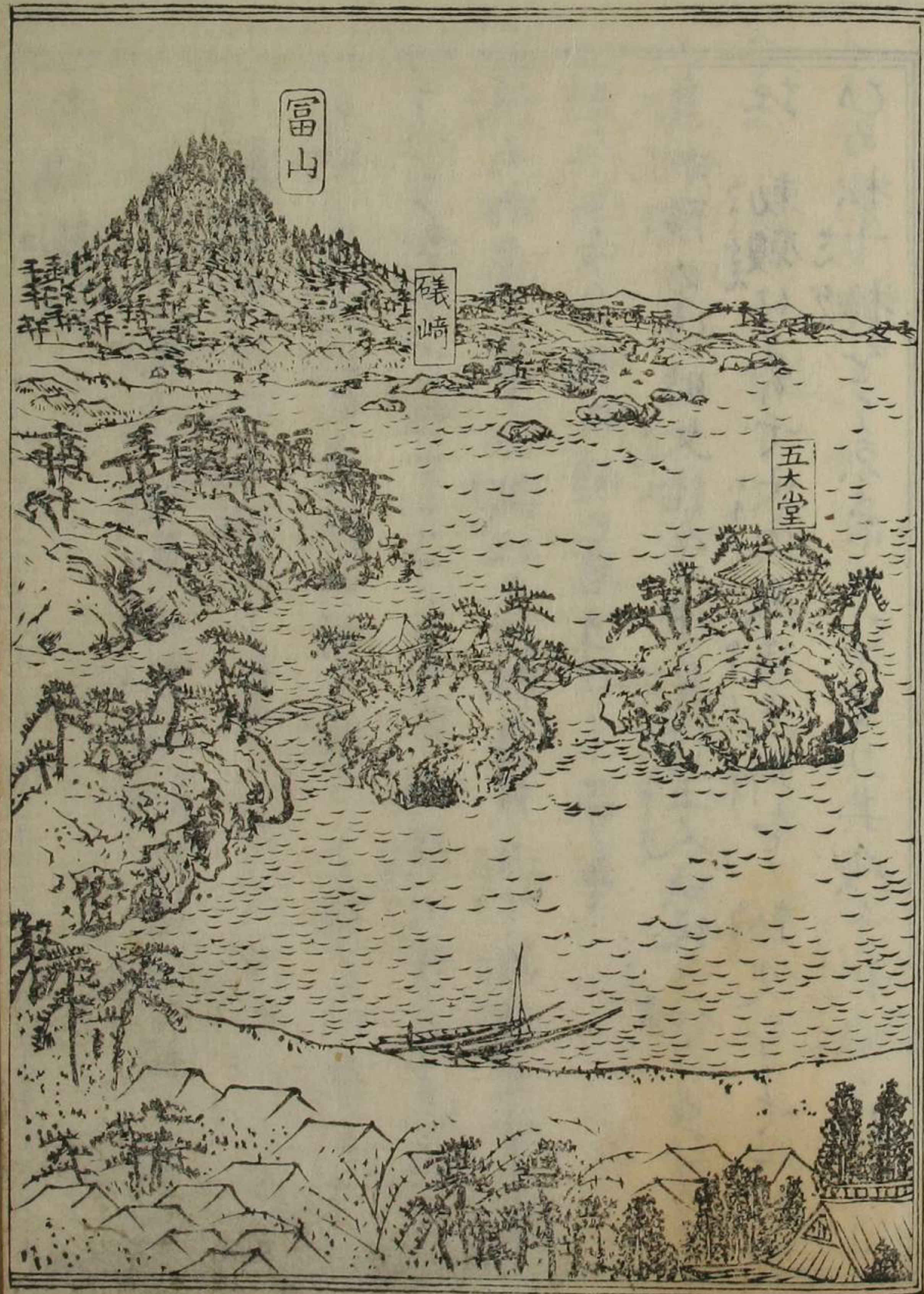


天島









表三



松嶋圖誌

押名におふ松嶋ハ陸奥州宮城郡松嶋村にあり安藝  
州嚴島丹後州天橋立とおちりて日本の三景と称  
す中よも天成の奇絶四時不隨さほくに晨夕  
うつりかたをて極まるるを区域廣大し七日を經て  
詠めあつる事と誠に去の松島哉天下無雙とす也  
古人も云り極松嶋と名はけりる事  
鳥羽院の時時文治年中見佛上人は地は位一むひと  
勅願によりて大内藏康光卿を勅使として此処に  
ひめ松千株をうゑさせしめてより其頃千松嶋と称せり

とらや後々略して松嶋とよぶ古歌よも松嶋といひり  
今ある松ハ千株万株の数を志るべしはせしとも同村  
此内阿弥陀山といふ処に勅使松とよぶもの二株有り  
一株を圍ハ尺餘一株ハ圍九尺余ありこれ即古くはせ  
たまふ松なりとも此文政の頃より凡六百九十餘年の  
星霜を經るといへども弥茂り榮て緑の色殊に深し  
按ずるに松嶋の名ハ文治より以前此和歌よも尺一とれは  
は時よりはまうりありあつるべし或は松宮の名あり  
よふとて子株の松を栽せしむにや志るるなりは  
一説或人乃案内記に達磨大師この松嶋よとを



わむ大澤おほさわ 松考の南にありといふ処に来らせり小茂聖徳太子待  
たまひし待嶋といふは説く捷る時を待の字を用  
ふべし 鳥羽帝の時より五六百年もあゆむ  
也されども信ずはにたゞの又案内記に見佛上人法嶋  
みて日々法華を讀誦志々小茂鎌倉の二位乃禪尼夢  
みて天竺の佛舍利二粒姫子松千本に法文をそめて  
贈りしふも松考といふときも禪倉の時よりあ  
に松嶋の名ありき古きも出されは是亦信ずはにたゞ  
松嶋といふは總名にして其内小敷多の勝地靈跡あり世は  
八百八島ありきといふは大小の嶋を数多しといふべし

今まれをかふるに松嶋村は属して名は嶋三十五  
あり 五大堂の島二つ并ニ甚ちひされ嶋茂合せしむる時を四十にも何はまじり 其餘他村に属し  
て松嶋乃海面小くなり眺望に入る島を數十は  
何まじりみな海面はおたろひて碁碁に石をもり  
しるがぬくはづきも争て奇狀を呈し中にも古より  
名高たき雄嶋なり名なき小嶋は亦も多るる一  
其考何れも天造の自然にやてあより見ると後より  
詠むるときぬく乃形骸なき棹をすめ舵をめぐり  
に随く千態萬狀かぞへ尽し難しがなに里人といふ  
どもあはれくそ名をたゞるもありはまじり其又も



容をもていさぐ八百八もいふもおろりなるべし  
里俗乃  
日本氏言の言とく八百八の言のかげくちなるもの都の海に  
あ上代此人乃よみく〇凡東海も何れの言も浪あはれ浪  
はげしくしく日和よく風静なる時も浪声耳に喧しく  
たぐは松嶋も海面に数十の洲嶼をさくへるあは絶て  
浪なく海面平にして鏡の如く碧碌澄徹して面をうつ  
し見るへし其中も数十乃嶋くあはれさく譬へ三千の  
宮女粧を凝して宮房に列するが如く画も及ぶざる不也  
〇此嶋松をもく名はけて殊に松樹多しその松根を  
巖石によせ枝幹も休風も撓めさく屈曲偃蹇しける

委嶋六十一

さう臥すが如く倒るが如く其海面に俯しけるも  
龍蛇の水に入ると疑ふや休ま筆此及ぶべきにあは  
ず〇凡何國乃休辺も地もつきたる処ハ沙汀斥鹵  
とありく清潔形も次は雲大小の嶋くもな断岸と  
なると多くい下狭く上廣くして崩まんとける形乃  
如く或も樹根をあはれ或ハ奇石を出はる言ふとに  
もな如此なり〇は一村もな瑞岩寺の所領にしてすべ  
く殺生伐禁むるゆ急鳥鷗の類も人ななれて驚らむ  
又大魚岬に近づた瀬を蹴り躍り出るるあり夜も  
入てそ音をきく時も殊更幽静此類を助く〇此地



風景の羨なる事春夏秋冬をこころび又晝夜昏且を  
るごとく遊人のある所なり中にも見りなほ是  
雪此朝な里見なき里人を目茂驚く思ひも  
身をうち叫びんとす誹に人間は何るべ境鬼に非  
むといふ○毎年七月十六日乃夜大施餓鬼とく法上  
百八の燈籠を流し遠近群聚して是を見る其光法を  
涵し天光照く数多の燭火の流るに随て或ハ  
あはき或もかくるさぬたさむべ詞なり

○長老坂 仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂有  
はまよりさめく松嶋の法面を見る昔瑞岩寺臨濟

関山法心上人松嶋へ下りて時法衣にて衣をぬきまき  
を長老坂と名づくといふ 法衣の備位の所に僧位何なる

按ぶるに今眺浪の字を用ふは所法上哉眺望を  
ゆえに名づくといふ好事の文士附會するなるべし或  
坂長く疲労し身老るに長老と名づくとも附會乃

説なり

○西行もぐ松 長老坂名の傍れ山上にあり俚俗の説ふ  
飛行も 鳥羽院の北面乃士なり密に宮女も通せしが  
そ女度うとなきふ阿まむと云に西行其詞を解せ  
僧とちの諸國を巡りて爰に至る乃の傍松れ下は牛に草



うねま翁ありて牛飽あはざるをあこがれありて罵ののしりめき入  
るひまき城やまの翁おきな同おなく伊勢いせの浦うら阿漕あせうがううに  
ひく綱つなも度たううなままばああはれれずずとといいふふをを以もてて答こたふ  
西行さいぎやう耻はぢははままりり依よてて西行さいぎやうももどどはは松まつをを以もて  
翁おきな即すなはち松嶋まつじまの明神あきみをを里さとととて

一説ひとしやうに翁おきな乃すなはち松嶋まつじまにまるる后ごの入口いりぐちより童子どうごの牛うしををひく  
ままああてて和歌わかををよよめめりりるる月つきににそそふふ桂男けいなんれれるるひひ来きて  
すすたたちちむむとと誰たれ子こああるるんん童どう子ごききてて雨あめををふふり  
鹿かももかかりり雲うみももぬぬりりははむむととままささととままたた子こああるるんん  
ととよよみみくくくく西行さいぎやう大だいにに耻はぢはは側わきなるる松まつをを手ておお志しるるべべと

して歸りぬ今その様さまはかままく松の大木ありそ童子

を松嶋の鎮守山王しんじゆざんおう格現乃化身也かたみやまのこゝろにあらはれしなり

とくく石あり僧の形に似たり

○山王社やまおう 松嶋村の鎮守也 淳和じゆんわ天皇乃清時せいじ慈覺じかく大

師江え嘉坂か本もと比山王ひざんおうを以もてて勸請くわんじゆししぬぬふふ初はつもも五大堂

天童てんどう菴あんの側わきにありし城しろ寛永十九年の夷雲居うしぐも和尚

々乃すなはち爰こゝに移うつせりしと云い毎年まいねん四月中しがつちゆう申まを乃日申ひのまをの刻とき糸いと或ある有

○観音堂 木像がくざうの観音くわんおん慈心じしん僧都そうづの作つくと毎年まいねん四月十八日

糸いと或あるあり

○天麟院てんりんゐん 瑞岩すいがん寺てらの南横町なんごうぢやうといふ所ところ乃裏うら比ひ方かたにあり



先太守貞山公の侍娘にて徳川氏越後少將忠輝  
朝臣の夫人となりぬひしが忠輝朝臣ありて飛弾列  
に諱せりまぬひし後夫人を仙臺にぬり落飾し西館  
といふ處に住ぬひ老後此処に移り六十八歳にて終り  
給ふを爰に葬て此寺に立はるとぞ

○圓通院

瑞岩寺の西南生薑浦といふと云ふに有

先太守義山公の侍嫡子越前守光宗公十九歳にて早  
世しぬふを爰に葬りて此寺を立はるとぞ

○瑞岩寺

青龍山瑞巖圓福寺と称し山城花園妙心寺

の末流にて臨濟宗也

凡松岩にある所の  
古き臨濟宗なり

古き松鷲寺といふ

仁明帝承和五年七月めり此寺を建るといふは此寺

嘉新山延福寺と称して天台宗なり其後最明寺入道

時頼鎌倉の執権  
小条お模此所より末り法心上人となりて天台を改め

て禪宗とて法心を開祖とて松嶋山圓福寺と称す

そより大覚覺雄智覺覺満明極といふ唐僧来り

る位持以九十一世義山和尚に至りて鎌倉建長寺の派と

なり九十二世実堂宗中和尚より妙心寺派となすり慶

長十年一説は  
九年

貞山公再び造管しぬひ同十四年落成

永く伊達家の宗廟とて寛永十三年 義山公先君

乃遺命によりて雲居和尚を請待し中興関山と改



て瑞岩圓福寺と称し承和五年戊午より文政三年庚辰まで凡九百八十三年

一説に時頼入道旅僧の姿となりて行脚して松嶋に  
来り給ひ頃五大堂に舞臺あり能奥行ありし  
戎時頼も多く乃人にまねきて見おしむひしが時  
の役者れつちなきまや時頼おもつてを声高く笑はま  
しを僧徒怒りて時頼を打擲などせしやばやうふ  
いひこむ其処戎逃去り奥相窟にかくれ一宿  
たぬひ鎌倉に降りて後天台僧を追放し法心上人  
を関山とて臨滄宗を改め松嶋山圓福寺と名づ  
くとゆふ○按むるに又一説に松嶋寺天台の関基を

淳和天皇の御時天長五年坂本山王を松嶋  
に移し慈覚大師戎別當とて三千坊十萬石の法  
寄附ありて時々青竜山圓福寺と云 龜山天皇  
の御時文永年中に至りて松嶋山圓福寺といふと  
いふも未審○法心上人俗名真壁平四郎僧也成  
宋の時に入唐し徑山寺の無準とて僧に從て法  
を受け帰國して後法をひりけり委したりと  
元亨釋書東國高僧傳等に見えたり偈あり遠入  
徑山分風月歸開圓福大道場法心透得無一物  
元是真壁平四郎又新後撰に又仏上人の和言とて



蓮性法師松崎へまうで法門など談じて取りける  
はうりりる本夜たかの闇路やみに迷ふ身なりとも眠ねむさる  
たむ忍哉尋ねん○雲居和尚うんこも坐ま攝津さつの勝尾  
山に住せり 先太守さだのの招まねによりて松寫まつに来きり或  
人の傳へし拙語せつごよ云居和尚うんこ瑞岩ずいがん奪うばひありて夜ごと  
は雄嶋ゆうじまの座禪堂ざぜんどうへ通ひて觀念くわんねんを修もとへ夜ふけり帰  
けるがあは人和尚にんわう哉や誠まことんとく最暗さいあんき夜をえりびて  
道の傍かたはら乃松なつ木きにのぼりて和尚わうにぬる哉やちて木の  
上うへより手をやへその首くびを攫つかむるに和尚わう立たちてあり  
て少すこしも動うごくば志しづし時とき屋やもそのほりてありし

うばそれ人あはきく手哉てたなせしに和尚わうも常じょうのぬ  
く寺てらへぬりぬそ後のち禪ぜんるて和尚わうと拙語せつごのはいづくに  
ちづぬるや夜よふけり淋しみしれをばるく通とほひあふ  
夏なつ年月げんげつ久ひさしりれむあやもるも有あつらんなど云  
しに更さらなるしと答こたへけるあるもの己おのれがなせるもの  
んよあるまにそまことななくさほぐみ問とひすや  
ふ和尚わう答こたへしゆふや或ある夜よ志しづく乃すなは事ことありて久ひさ  
く立たちてほり居ゐるが時とき返かへはむどその手て何なにか  
なるや覺おぼへしきは必かなら若わた人ひとなせれりつづる夏なつなる  
べしと言いふと我われ



佛殿ぶつだん 豎たて 戴かぶ 拾とく 壹いつ 間かん 横よこ 拾とく 戴かぶ 間かん 東内記に方丈 二十又間十八間 正面しょうめん に  
 先さき 太守たうしゆ 負山公ふせんこう の尊像そんざう 甲曹かうそう の佛ぶつ 袋束ふくろむす を法前ほふまへ 子胡銅こどう  
 の心こころ 觀音くわんおん 天竺てんぢく より傳来でんらい して往古いんこ 松鷲寺しょうじゆ 開基くわいき の時  
 より本尊ほんそん との側わき に毘沙門びしゃもん 木像ぼくざう 慈覺じかく 大師だいし 作つく りた  
 に二十人にじゅうにん 乃なほ 位牌ゐはい を安置あんぢ せりたま 負山公ふせんこう 殉死じゆんじ の寄よ 右  
 又また 十七人じゅうしちにん の位牌ゐはい みたま 義山公ぎさんこう 殉死じゆんじ 此輩こゝら 之奥のおく の間上  
 段だん 中段ちゆうだん 孔雀くわんぐわう 乃なほ 間文王まぶんわう の間ま 菊きく の間ま 栴せん 乃なほ 同墨どうぼく 繪ゑ たる  
 鷹たか 乃なほ 等らう 構かう 子合しあひ 天井てんけう 欄間らんま 乃なほ 彫ちゆう 拵じゆう 玄閑げんかん 等らう まるくたま  
 諸國しよこく の名匠なめいしやう をあつめり 是これ 哉や 造つく り大襖おほすそ 小襖こすそ 等らう の繪ゑ  
 も名高なかつた 画工ゑがし の筆ふで にして巧たくま 妙なま を極ま め精微せいゐ 哉や 尽つ きた

皆菱長年中再興の造営なり

○火鈴かるとん 瑞岩寺ずいがんじ にある什物しつぶつ 也高さ七八寸しちぱん 徑けい 四五寸ごしゆん 福ふく もある鈴るとん なり形かたち とはりの鐘かね の如ごと くにして中なかつた に舌した のり

水みづ 引ひ てるむすひをく  
手又極白紙を紙を括み



先さき 年とし あやまりて井い の中なかつた へ  
 おと〜〜と〜と〜と響ひび 隙ひま あり



昔むかし覺かく滿まん禪ぜん師しの時とき法ほふを修おほして唐たう土ど徑きん山さん寺じの火くわ災さいを  
救すくえりし謝あが礼れいとて徑きん山さん寺じより贈おくりれりといふ後に右  
毎年まいねん正月しょうげつ元げん日にち曉あけ丑うしの時ときに塔たう頭とう此こゝ僧そう一人ひとりこれを頸くびに  
うけり兩りゆう手てもてふり鳴なりて松しょう崎さきの村むら中なかを巡めぐ行りき火  
災さい戎じゆう禳かうふの咒まじ法ほうといひりて音ね清きよ響ひびきりて數十しゅうじゅう丁てい  
の外ほかまづも聞きこふといふ

一いっ説せつ俚り俗ぞくの傳つたへ龍りゆう宮きゆう城じやうより唐たう土どに傳つた来きりしを  
贈おくりきりといふ今いま按おしびるに古いにしへより唐たう山さんより命いのち令しめ戎じゆうあ  
まねく人に觸ふ渡わたき時ときは金かね鐸たつといふ扱あつかひりてこれ  
を傳つたへふといふありて因よをえるに此こゝ火くわ鈴しんと同おなじ

さきば彼か方ほうに作りし金かね鐸たつなるを

○翁おきな面めん これ亦また瑞すい岩がん寺じにあて春はる日にちの作つくと云い傳つたふ願ねがひ  
口の朧おろより糸いとにてつなは合あせり松しょう嶋じま寺じ天てん台だいに五ご大だい  
堂だうに舞ま臺たいある時ときまづこれをつ用もちるといふ時ときハ五ご六りく百ひやく  
年ねんより以前いぜんの扱あつかひり又また翁おきな嶋じまといふ後此こゝ面めんの不思議ふしぎ  
にてり名なはくといふ後あり

右みぎの外ほかも仏ぶつ舎しゃ利り又また鎌かま倉くら二に位いの尼あまの足あし仏ぶつ上じやう人にん  
小こ贈おくりりといふ法ほふ文ぶん等らう什じつ物ぶつ數かず多おほしりといふ後に右みぎ次つぎ又また寺じ  
中なか厨ちゆうの竈かまど此こゝ邊へらに火くわの用もち心こゝろといふを彫うちる板いた榜ぼうあり  
秋あき葉は山さん三さん尺せき坊ぼう乃なり筆ひつ迹せきとて近ちか近ちか此こゝ先せん住じゆうの和わ尚しやう此こゝ



時に古きをかけし其字體さほぐにうごどりす  
 尋常なるに見ゆるに世の人こそ哉賞美ま  
 ○朝鮮梅 瑞岩すれ庭上は二株の梅あり一は紅花  
 一は白花なり其花重瓣にしく中は有る葉の外に葩  
 の間おとに又少しつゝの葉あり香氣も殊にすぐきり  
 実と三つ四つ又ち又つ六つを同じ蒂には交て尋常の  
 梅子よりハ小く年よりて十餘も結ぶ事ありさき其  
 老樹なほあや年経るに從て実を結ぶ事少くなる  
 此に 貞山公朝鮮よりりるひし時種を好く爰に  
 栽させりふと云秘傳花鏡といふ書なほある品字梅駕

八ッ房の梅





鶯梅などいふ種類なるべし品字梅を日本にもありて  
そむそ香そ実そ形奇なる所に 後水尾帝花香実  
といふ號を修ふとあり

○法身窟 無相窟ともいふ瑞岩寺中にある窟也  
竝四間或尺横四間或尺五寸あり最明寺入道は窟に  
宿して法心上人と改宗の事を約せりといふそのち  
七八十年ほどさ嵯峨天龍寺夢窓國師の脚しては  
此に至り天台止觀を講ざる哉耻ふといふ窟の上に  
法身夢窓窟は五字の額あり

○經堂 瑞岩寺の内より先住通玄和尚建之といふ

○千佛堂 瑞岩寺の内より本尊木仏釈迦坐像

長戴尺た太に千体乃仏像長四寸つ雲居和尚建

立はといふ

○龍月院 ○護國院 ○寶珠庵 ○圓月庵 ○大光庵

○聯芳菴 ○法雲庵 以上瑞岩寺左の  
旁に列す

○萬松菴 ○江月庵 ○昔松庵 ○傳曲菴 ○紹隆庵

○得住菴 以上瑞岩寺右の  
旁に列す

六十三ヶ菴瑞岩寺乃塔頭なり

○法雲庵の庭上に石二つあり一ハ長五尺幅壹尺五寸  
一ハ三角形三尺ぬどづあり昔唐僧覺滿禪師此庵



に住せしはあは時僧徒を集めは二ツの石へ水を汲うけ  
させぬふ事頻なりれば何れぞと問ふ唐土徑山寺  
母火災あり我水の印を呪ししときを救ふなりと  
水を灌地てやま次晩景に至て終りぬや後二三年を  
て徑山寺より禅師に書簡を贈て其功を謝し禮  
物と鈴を贈るこきを火鈴と名づけけて今瑞岩寺  
にあま

○大光菴の玄関に溪白は二字茂書する扁額あり瑞  
岩寺先住唐僧明極和尚の筆なりは庵を松崎す天台  
乃時より何れを古刹寺あり昔々當村の内大光山といふ

山にありしを再興の時より乃処に移せりとぞ

○觀瀾亭 月見崎といふ所あり 太守の侍茶

屋あり 負山公 豊臣太閤より伏見法殿を拜受

て此所に移し立はとふ柱を那梅乃四方面

也 案内記は唐木四ツ 雨奇暗好四字の額 先太守獅山公

の御筆觀瀾亭三字は額佐々木文山乃筆あり外圍

乃垣に細竹を網代に組ししを紐や四ツ打十二あり

といふ是茂貝玉垣と名づく尋常にあり是亦伏見

法殿より移せばありとぞ 貝玉垣を玉垣に代るの義也  
替玉垣と云へしといふ説あり

梅をるに雨奇暗好の四字を宋の蘇軾が西湖の詩



に出たり西湖の勝槩度山にありて天下第一と唱ぬ  
松崎乃風景も日本は何もて第一と称はされハ西湖  
の秀句哉とらる此亭に名づけし最面白し

西湖初晴復雨

蕨軾

水光潋灩晴方好 山色空濛雨亦奇

若把西湖比西施 淡粧濃抹也相宜

○陽徳院 瑞岩寺の東北にあり 貞山公の夫人田村

太膳大夫清顕朝臣は法娘をここに葬てはるを立るといふ

○獨鈷水 陽徳院の内にあり昔慈覚大師獨鈷をもて

土伐穿れしに清水湧出るといふ今に大旱にも涸る

るなりとらる

按むに天麟院の境内にも獨鈷水といふありて

傳ふる所なきと同じとされども昔々その沙汰なけ

きば近頃の事とおもる

○天童菴 瑞岩寺の東北にあり本尊十一面観音

木仏立像長き尺五寸日作陽徳院殿不持といふ

佛といふ

○宮千代墳 天童菴の境内にあり高貳尺余めど

九尺宮子代といふ童子を葬る所といふ昔此

ゆらに宮千代といふ童子あり容顔うるをいふ



才性柔和にして尋常よかきるあみ天より降臨  
するの童子なりとく時の人これを天童と称すは庵  
久しく住する所に菴城も天童と名づけたり其  
見仏上人侍嶋まで日夜法華を讀誦しぬひし  
宮千代睦守するより怠らば日哉徑て上人と  
讀誦せしが其声清らかに正しくまろきく人  
奇異れ  
忍びをなせしが上人遷化の後童子も福なく身  
ぬさてまそは側に勸請しなる鎮守山王の化身  
に成  
あまもんなど人といひけり

梅ずはに封内名蹟志は宮城郡南目村宮城野

の戴拾四間東畑中に空地小塚あり里人これを見  
墓と號し昔松嶋寺の見宮千代といふ者此野まで  
死を里人憐れこきを埋る塚を築くそ後人乃  
好むふに塚の内にて夢あるをきく月夜  
草葉は宿りしとらふて嘆く也かく何る事  
久しかりしが松嶋寺の徹翁といふ僧ありそ  
ころそれ宮城母の原といひけきばそ後と止  
とぞ又何る人乃況に宮千代宮城母よ来りし和歌  
の上乃句を得て下れ句成む久しくあやむら  
らひ終る病となりて身はうらぬ遺言にありてその



なれた骸を宮城野に埋むとは二説に據まば宮子代  
乃墓ハ宮城野又あるを信とすべたは似たりされども  
皆俚俗に傳ふる所にして孰を是と定めざらん  
○松嶋明神 今ハ松嶋より北の方高城といふ駅の西  
にあり紫明神といふ昔々赤宮の内蛇が寄る所  
又阿里しが此處 貞山公の功臣山岡志摩守也云人  
の賜たりる在所とて數代の故阿りて其  
家断絶志けまば蛇が寄居住此人民と那離散してけり  
其故言城駅に移りくる者多かりしは本土の神祠  
なきばとて松嶋より乞ひ受て今の處に祭はるといふ今

蛇が寄に梨木明神といふあり即往古松嶋明神の右  
跡なり  
一説に々桂嶋にあり明神と即古の赤嶋明神なり  
といふも非なり  
○御舟藏 太守の御座船等數艘あり松嶋より高  
城へ通路のたゑに水主町とて數十軒阿りて是を治る  
時々船乗の替古あり  
○正海壇 正海壇が峯といふ處にあり天台の僧正海  
といふ人の墓なりといふ高六尺周六丈ぬど阿りされども  
今も里人も志る者なり



○護摩壇 山王山といふ所にあり高三尺ほど四方二尺  
ふすむとそ側の大きな窟に十二薬師を建立し  
護摩修行ありしと云ふ

○法性院 竹の浦といふ処にあり ○一華菴 柿が

浦といふ所にあり ○地藏堂 一華菴の前よりあり

○五葉菴 檜岡といふ所の山中にあり 客殿に五葉

庵三字乃額あり 黄檗木菴の等なり

○雁金山 法崎の西南にあり 二つれ高き峯也 雁乃

飛のふに似るより名づくといふ 下の浦辺に出る処  
を腕が崎といふ 其形状人の腕に似るより名づくといふ

一説に即唐が法崎の轉ぶるなり 又一説に茅野が寄  
の訛なりと

○あねとり山 松岑の西南にあり 一説は朱鳥の訛也

昔仙人ありし 赤たをを玩しと云ふ

○海無量寺 福聚山と秘を松岑の内南にありて

大沢といふ所の山乃半腹にあり 瑞岩寺より十余丁

あり 陸々山路に嶮峻なり 舟より行へば 此の庭

より 沫上の眺を富山小おとす 富山と崎をまき

くながめ 此を近く見る 別に一景の勝地なり

○瑪瑙羅漢 寺中に瑪瑙にて作りし 羅漢の小像



教あぢ多おほあり一つ毎ごとにさほくの安やすよしてそ細工さいこう甚精せんせい  
妙めうなり昔むかし摩ま山さんより船載せんざいくくるを瑞岩ずいがん古先位こせんい勝雲しょううん  
和尚おしょう肥前いぜんの長崎ながさきにてほろりとひふ

○羅漢樹らかんじゆ 寺中てらちゆうにあり俚俗りじやくこそを仏ぶつのなる木と云  
皮かわも扁柏へんぱくの如ごとく葉はハ金松きんしょう葉はに似にたり冬ふゆを経へるそ  
落葉らくえつせびぞ実み黄赤わうせき色いろまじり俚形りけいに似にたり故ゆゑに  
羅漢樹らかんじゆと名なづく摩ま山さんにてもまきをを羅漢柏らかんぱくといふこの  
木き木曾山きそやま中にありいぬまた又またくまきともいふ

○達磨堂だまどう さまの上の山やまの頂いただきにあり俚俗りじやくの傳でんに達  
磨だま大師だいしの所に坐ざ禪ぜんくまふといふ熊耳くまみみ峯ねといふ

古いにしへに額がくあり々々ハ寺中てらちゆうに納たくむ達磨だま大師だいし赤衣せきえハ木  
像ざう日本にっぽん三連磨さんれんまと秘ひき片岡かたがわ 和八幡城 はちまんじょう けいとたぐ  
三體さんたいありととら

○葉山はやま權現ごんげん 松崎まつざきの内うちにありて禁山きんざんといふ  
にりり真山まやま氏うぢ勸請くわんせいとふとも年月としげふも志しきき解脫げだつ院いん  
といふ額がくあり

○葉山はやま清水しみず 葉山はやまにあり水みづ清きよ冷ひやまじり大旱おほいづかにも  
涸かわはるまじり

○湯ゆの原のら 葉山はやまの辺へに昔むかしも温泉おんせんありしが天台たいたい  
改宗かいしゆう乃すなはに及およびに及およびり冷ひや水みづとなれりといふ数かず十年前じゅうねんぜん



瑞岩寺先住の和尚癩瘡を患へて夢中に葉山  
栴現の告あるにふりてけぬの水を風呂にたてて浴  
せしむば速に治ししむるに人々来りて湯治に  
はるかにたゞきりしむるに自然の温泉もあらず  
えて焚湯ぬる

○窟 松島の内室に窓あり大小百余も有べし  
また天台の時僧徒の坐禪などしむるに又里  
人の穿てて窖蔵とするも多し

○七浦 竹の浦 林の浦 震の浦 胡桃の浦  
生姜浦 片の浦 光徳の浦

○八崎 象鼻崎 小松崎 亀の崎 須崎

法師崎 蛇の崎 津が崎 月見が崎

右の外に天神坊が崎判官坊が崎といふあり  
その外に天台僧徒の住する所といふ

○すかき橋 天童菴のあまの五大堂へゆくに橋  
二つあり一は長三間一は六間何れも幅六尺ほど有  
るに梯子のぬき間をまわしてゆくに足のかは  
べたぬきありて下敷板の隙にさしゆく激はるる時ハ  
漫々碧水を湛ふるにさきをこぼるるもの目眩  
足震慄しむるにぬるもあつめづるに制也



○八幡祠 五大堂鐘樓の側に小祠あり昔々當所  
八幡崎と云ふ処に有るを寛永十七年十一月は交  
り移されりといふ類聚國史畿外奉勅宮社の部  
に 舒明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅  
使 早良連惟保 時疫といふ此時疫癘流行すはにり  
て 勅使をたて祈られりなるべしされバ千三百  
年より以上の古社なり今に毎年七月廿一日祭式有  
○五大堂 江に近た処は小嶋二ツあり堂をたて五  
大尊像を安置以大同二年坂上田村磨東夷征伐  
しり下りぬふ比建立志るふそ後慶長五年 負山公

刈田郡白石城を攻めし時夢の告あるにりて同九年冬  
修覆造宮等何り前にけり 鯿口に乾元元年正月十  
日草壁入道勸進五郎為武運長久寄附之とあり大同  
二年より文政三年庚辰まづ凡一千十五年乾元元年  
より凡五百十九年

一説に田村磨の時毘沙門をかくに安置以五大堂の  
慈覚大師の時に至りてこれ成おくと後毘沙門を  
飛本ぬひぬ今も唐那といふ所の奥尾岡村南光  
院と云ふ修験の処にありとぞ  
○御嶋 々々雄峯と云けり又小嶋ともりふ 景行帝



の法時日本武尊东夷征伐の時法崎に舟をこせ  
休息しぬふより法崎と唱といふ

一説に 鳥羽院の法時見仏上人は地に住しむ  
る法力深く神物を役使せしむる事那と夢し  
めして 内裏より佛像器物あつびに法衣等と賜  
りしより 松崎を法崎と唱ふといふ一山の碑文  
にもは説を用みしるべきものそきより以前は古  
歌にも松崎やをいはしむる事多しれは法崎  
の名ハ古事と見えしり

○渡月橋 法崎へくる橋あり長十間余あり古乃

松崎橋を是なるべし 民部卿忠教の言に 是を分て  
そよりゆるびは案の案候する事いはれ橋

一説に古の松崎橋々々五大堂に在る橋是あり  
と云ふされどもいづきを證とすべきは相なし 今そ  
何きの橋を近記あるに云ふなす 又松崎ふ  
ををふしるるは外の古歌にも数多し

○稻荷祠 法崎の橋乃あなといはり 新法門稻荷と  
云づく祈る者必灵験ありといふ

○松吟菴 法崎薬師堂の側にあり一山の碑文は  
妙覚庵の舊址にして見仏上人頼賢和尚などの居る



まじく處をり

○薬師堂

○碑 松吟菴の側にあり高九尺幅貳尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天嶺和尚の文なり天嶺の師通玄和尚はこれに位せり顔破にありてその三十三回忌の時に修覆再興せりなほいふるを書つゝ

○見佛堂

雄嶋にあり里人これを奥の院とふべし上人法華六万部讀誦の道場なり

○坐禪堂

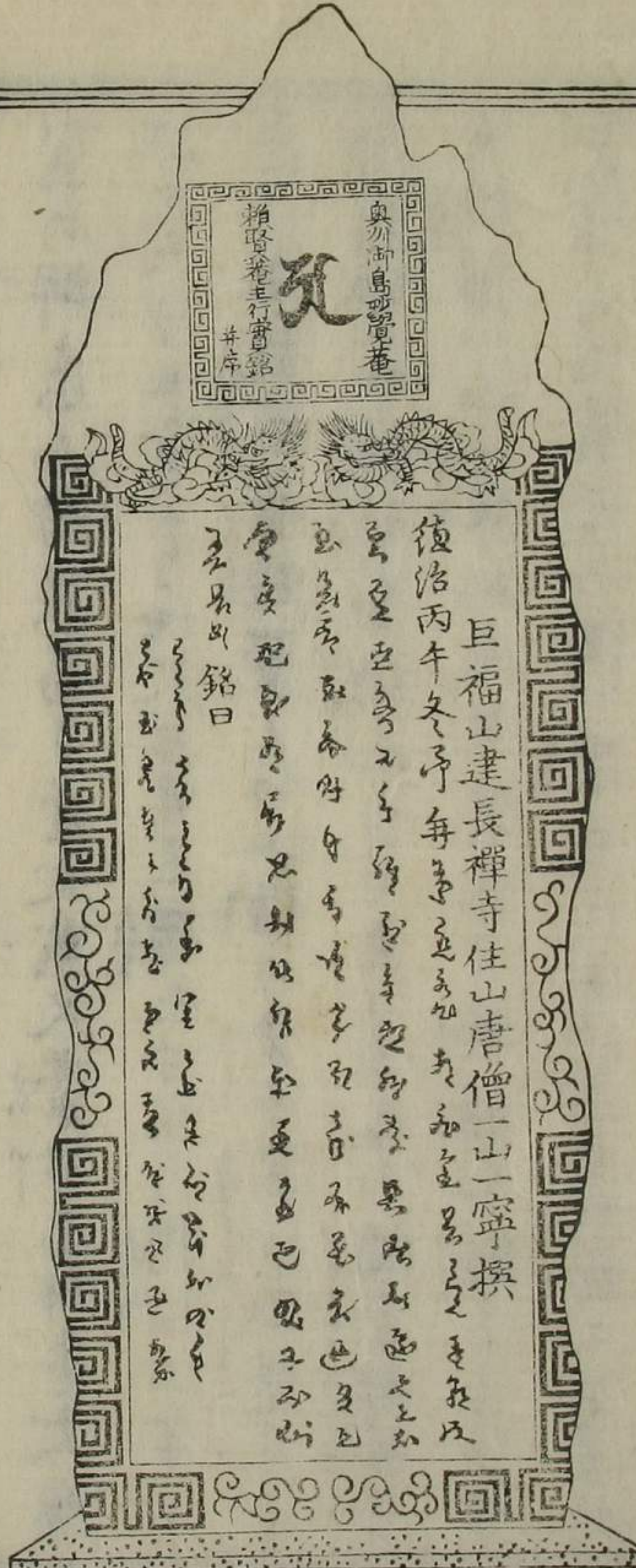
雄嶋より圓満國師こきを建把不住

軒四字の額あり

○頼賢碑

雄嶋の内西南の方にあり世の人を雄鷲の碑といふ碑惣高さ壹丈貳尺基石乃外き丈幅三尺六寸五分より四尺三寸と厚七寸あり徳治三年丁未の春觀鏡房頼賢といふ僧の弟子匡心孤運等が師頼賢の往行を傳んとて立ちたるなり鎌倉建長寺の住僧一山一寧の文并書なり草體を雜るるのり見るなる書なり文ハ甚むといふも典雅なるにたゞび一山と康僧に鎌倉に位持せり昔この妙覺庵に見仏上人住しぬしが頼賢も亦はこれに居る





真勢山島智聖塔  
井中  
光

巨福山建長禪寺住山唐僧一山一寧撰  
 後治丙午冬予年八十有九矣... 命我... 銘曰

人々帰依深く見佛の再世なりといひくべきなど書  
 つつねより徳治丁未より文政庚辰まで凡五百七十四年  
 になほ

○骨塔 頼賢の碑の側にあり五輪石塔高き丈一尺  
 三寸圓滿法師をめぐ建之洞水和尚再建といふぞ  
 下に深た壙あり人々死者の毛髮齒骨などをかきむ  
 ○供養佛 雄嶋の内前後た右の巖の面に率堵婆  
 又々仏號法謚等を彫り立ちくす敷をさして四方の  
 游客をなほをえる事を厭て徒に口は罵はのそあは  
 等いのせき 誹世に傳ふ予れもくくけ地幽邃闃寂



に〜海山の靈氣を鍾め〜るかにさ〜よ来るものな  
らば悽愴として感我発〜或も古を志のび今をい  
〜又も父母祖先を慕ひ亡毒殤子哉か〜む貴賤  
賢愚となく情あるものも〜の志うりそ感情の  
動〜に従ひ昔を追ひ本を報るふあは〜りは等  
の営をなゆる愚民に何り〜あや〜とするに〜  
に佛教に浸淫して無益の所為をなすと〜  
天下溜〜〜〜な志ありた〜は地は何りては  
るれ〜あ〜ぎ

○學生嶋 ニツおあ〜び〜似〜る〜り名づ〜一〜ハ

本島島十七

あは嶋といひ一ツもたまたま書といふ

○屏風嶋 屏風をしてたるぬ〜なるもの名づ〜

○福浦嶋 此嶋に竹多〜その竹よのつ穂よハ

らざれ〜も挿花筒に作りてあ〜ら〜る〜なり〜といふ

好事の人或も茶杓を作り又も尺八如意等哉

製は又一種乃竹あり尋常にかさり〜中の空な

く木のぬ〜刀眼釘と名〜〜利用と〜又そ枝を

も〜箸をつ〜るは処の名おなり松の名にお嶋〜

乃中に印志げた竹の緑に栄ゆる〜ことにはめ〜

たれ〜め〜にぞ福浦嶋とも名づけ〜なるべ〜



○毒龍庵 福浦嶋にあり洞水和尚開基本尊不動木佛立像智證大師作并芝所持の仏と云傳ふ又并芝の笈といふおあり高三尺ほど横を尺八寸ほど上下二段にしてたりの上段に小地辨天并十六童子の木像ありその長三寸ほどあり表を四面ともに滅金乃銅をほりて仏像又を雲氣等を彫付たりせよほいりにも近代のおよハ何と云えり

○毒竜菴記碑 毒就菴の側にあり享保十九年甲寅瑞岩寺天嶺和尚を建碑文の大意ハ此毒就庵と洞あり和尚修行乃地なるが近交比荒廢

まを修造落成まはにりて 太守吉村公に請て来臨あり席上に画師周良をめぐり洞ありの像を画しめ又和哥一首をよみ風景を賞しり又は日に調伏壇の竹藪の中より曳出せしなといふるを書つて後よりそ文艱澁にりり浄嶋薬師堂の碑よりゆき難し

○坐禪石 毒竜庵のふにあり洞あり和尚坐禪しゆふといふ坐禪石の三字を彫付り

○硯石 福浦嶋にあり長き尺七寸横を尺七寸洞水和尚子習石といひ傳ふるものまれの



○調伏壇 福浦嶋にあり時頼入道松嶋寺改宗の時天台の僧徒さくま聚りて時頼を調伏しといふ今に熊野神をこゝみ祭まじり

○徳浦嶋 福浦嶋の東にあり

○經の嶋 福浦嶋の南にあり經塚といふありて

寺尺又寸周八尺松嶋寺改宗乃時天台の経文を以て変に焼す、塚を築く嶋に名も是にまじりといふ

一説に足仏上人法華六万部をさくに埋めるといふも非なり

○五重塔 経が嶋にあり高き丈戴尺五寸享保年

中萬人戒供養とて天嶺和尚建之といふ

○公羽嶋 昔松嶋寺天台宗の時五大堂の前に舞

臺ありて能哉興行せしに公羽の面体上をこえては

嶋まづ飛来るかに公羽嶋と名づくといふ五大堂より

此嶋まで海上凡七八下ぬどもへぶちたり其面を瑞

岩寺にあり

一説案内記に昔天台乃時能興也、公羽の面春日の作なりしが故ありて土に埋もき夜中に光をばちちては嶋に飛来るよりて名はく也



ひふ  
○旭嶋 昔々此嶋に弁天祠ありしと云ふに其跡あり

右雄嶋より旭嶋までを松嶋の八嶋と云ふ七浦八嶋八嶋といふる古よりいひ傳へり太の外も名ある者たのめ

○毘沙門嶋 昔田村磨毘沙門の像を刻くその五大堂の寫に祭りぬひし其後慈覺大師五大明王を作りて其側に安置しぬひし其はあは時毘沙門光をたぬちりて此嶋に飛びさりぬひぬよりて嶋

の名といふ大黒嶋えびす岩まどりふ嶋の名も此毘沙門岩乃類に云うる名づけたること又えり

○千貫嶋 昔金賣橋次此嶋に渾し一晝夜の名に銭子貫文の利をばりより名づくといふ

○大黒嶋 ○夷嶋 ○小町嶋 といふあり ○いせ嶋 ○布

袋嶋 ○内裏嶋 ○すゞめ岩 ○あふみ嶋 ○鞍掛嶋

○鎧嶋 ○あぶと嶋 ○牡丹もち嶋 ○小福浦嶋 ○丸

の岩 九つに云ふる ○千部嶋 二つとなれり ○喜なれ嶋

○阿嶋 ○その己岩 ○鳥羽嶋 ○鴻の巣嶋 ○堂が嶋

○繪嶋 ○般若嶋 ○燒嶋 ○雁の祢し海 ○塔が嶋



〇行人嶋くろくろく 〇羅漢嶋らまん 〇地蔵嶋ぢざう 〇大鼓嶋おほつづみ 〇鐘嶋かね 〇折鳥嶋まげ 〇帽子嶋ぼうし 〇立巻嶋たてまき 〇鍋嶋なべ  
 〇橋嶋はし 〇茶臼嶋ちやうす 〇たや舟嶋たやふね 〇引通嶋ひきとほ 〇屋形嶋やがた 〇せいがんこれより 〇唐櫃嶋からび 〇かご嶋これより  
抵松嶋村の内なるべし 〇都嶋みやこ 〇筆於嶋ふで 〇硯嶋すずり 〇化粧嶋けいざう 〇みつみづ 〇の小嶋こ 〇離嶋はな 〇神かみ 〇裸嶋はだか 〇引嶋ひき 〇在城嶋ざいじやう  
 〇内裏嶋うち 〇后嶋ごう 〇十二じふに 〇蛇嶋へび 〇大抵おほ 〇藍谷あゐ  
 〇桂嶋けい 〇大なるおほなる 〇里さと 〇駒嶋うま 〇手代嶋てがや 〇大言嶋おほこと  
 〇小言嶋ここと 〇沖續嶋おきつぎ 〇汀續嶋あたら 〇依久嶋よきう 〇鐘志かね  
 〇舞子嶋まゆこ 〇二王嶋にわう 〇月星嶋つきほし 〇松分嶋まつぶん  
これより以上 皆桂嶋といふ

〇卯嶋う 〇の上の村 〇寒風澤さむかぜ 〇朴嶋うす 〇大なるおほなる 〇殊こと  
村里多し皆 〇宮戸みやと 〇こゝに大なる客なり 〇此に大なる客なり 〇此に大なる客なり 〇此に大なる客なり  
 えびえび 〇竹たけ 〇舞嶋まゆ 〇あ嶋あ 〇百合嶋はくげ 〇白當嶋しろあて 〇の上の村 〇毛け 〇の上の村 〇馬放嶋うまはな  
望金宮の神を 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村 〇の内の村  
 〇小放火嶋こはな 〇小放島こはな 〇帆ふ 〇の内の村 〇免嶋めん 〇大放火嶋おほはな  
 〇摩嶋ま 〇材木嶋まいた 〇の上の村 〇高嶋たか 〇雀嶋すずめ 〇椶嶋すんぐ  
 〇權現嶋ごんげん 〇なな 〇二嶋ふた 〇東風嶋とうふう 〇西風嶋せいふう 〇間風嶋まかぜ 〇小黒嶋こくろ 〇大黒嶋おほくろ 〇の上の村 〇犬嶋いぬ 〇亀嶋かめ  
 〇つつ 〇み嶋み 〇鏡嶋かがみ 〇の上の村 〇柳嶋やなぎ 〇屋や



○わけ田寫○はれき九の考○金剛嶋○薩陀寫  
以上村名  
詳ちる

右の考、大抵松嶋より塩釜まづ舟路二里の  
間左太に尺あるを志るの數多りまハ狂遺漏も  
あるべし又村名なども村志といはづぬる暇もな  
けまばあしくに書志るゝぬ必誤もや何ん

○松嶋八景

松嶋秋月 雄嶋夕照 梅浦早春 霞浦飯雁  
瑞巖曉鐘 竹浦夜雨 塩竈暮煙 江縣殘花  
○古歌

至陸奥見松嶋又海中有奇嶋往昔日本武

尊至此嶋國首國民崇之言御嶋 上宮太子

松嶋哉御寫者不見止日標方之月之都之外于尋者

和歌本紀下 上宮太子ハ即聖德太子の法王子ト

家隆朝臣

秋の夜乃月やをりまのあはれ京のつとむる仲乃つり舟  
あひくる哉はれ松の木のかより雲のたけり何の釣糸

皇太后宮大夫俊成

立更り又も来り見人松嶋やをり海の管を波にあはれ那  
木の葉やをりまう破にふるはれ月乃氷の干をなくたり  
昔より陸奥の奇枕多しといへる中にも松嶋ハ天



下弟一の名勝なきが代々の集に載る古人乃  
歌數多たがねにたけよもうは 志といふ書にえへ  
詩に至りてもこゝ國風にあはざるゆゑにや古人  
の賦詠多うてそを勝槩に敵はれ佳作を更  
になく唐土にえの代乃詩人一絶句何り

薩天錫

風光招我海山阿 拍手吟魂奈句何  
御嶋烟波松嶋月 到茲捲舌富樓那

相摸川 田原坊

松嶋やささくまづははや木の葉もや

松嶋三年三

或云芭蕉翁は地に来りて風景を賞てが詞  
の及むざるを志りて終に一句を以て  
去りぬゆゑなる家以歸りて後得たる句と  
す

草よさを誰まじくぬそこのさつる

▲産物 ○福浦嶋の竹 にえり ○岩長生 即巻拍

○石斛 ○雨漏草 即瓦常 ○城垣草 即法列骨碎

○寒ざら〜麻角菜 ○水飴 ○茶筍 ○紅蓮せん

るん 粳米を製し〜扁く圓く〜満月の形に作り

火にあぶりて果子とす昔は村浪荒濱乃百姓掃部



石斛



本草綱目卷二十四

とひふ者の子小太郎といひて羽州象浮の人の娘を妻に約しつゝいまご婚義とくのへざる前に小太郎病まゝ死しけまばそ女は変れきたり剃髪しつゝ江蓮比丘尼と称し瑞岩寺の南に庵をむきびは果子をんとぬて賣るを紅蓮せんをいと名づく今心月菴といふ寺にその住居せし跡なりとぞ果子を今も作りて賣るありは村の名おとけ

△路程 江戸より松崎まぎ丑の方九十九里 ○仙臺城下より丑寅の間六里半 ○千賀の塩竈



北の方戴里半法陸ともいり数回く遊客も必  
舟路を通るべし奇観多し陸路もさせば嶮岨  
多しなり○利府驛仙基城下より  
李峯通話より丑寅の方戴  
里半

松崎より高城驛まづ丑の方半里○同富山まで

寅の方戴里舟にりゆくともき里  
おとの陸路をあらし○同金花山まで寅卯

乃間二十里海上も舟にり敷なきとも松崎よりそぐさほにゆく  
舟もなり唐那より知まづのるべしさきとも風波  
穏あつさる

○同石の巻まづ八里半

松崎より高城驛まづ丑の方半里

○富山 松崎の東北手檜村の内にあり海岸に出て

高た山なり木立深くく晝といへどもぬのくく

半腹の大仰寺とゆふ寺ありその院中より眺を以

てば松崎の海岸庭上の泉ありぬく浮める鳥く

目の下にとちくく松乃録も手に摘むべしと云る

そ風景詞のねもふべたにあつぞおに古より松崎の

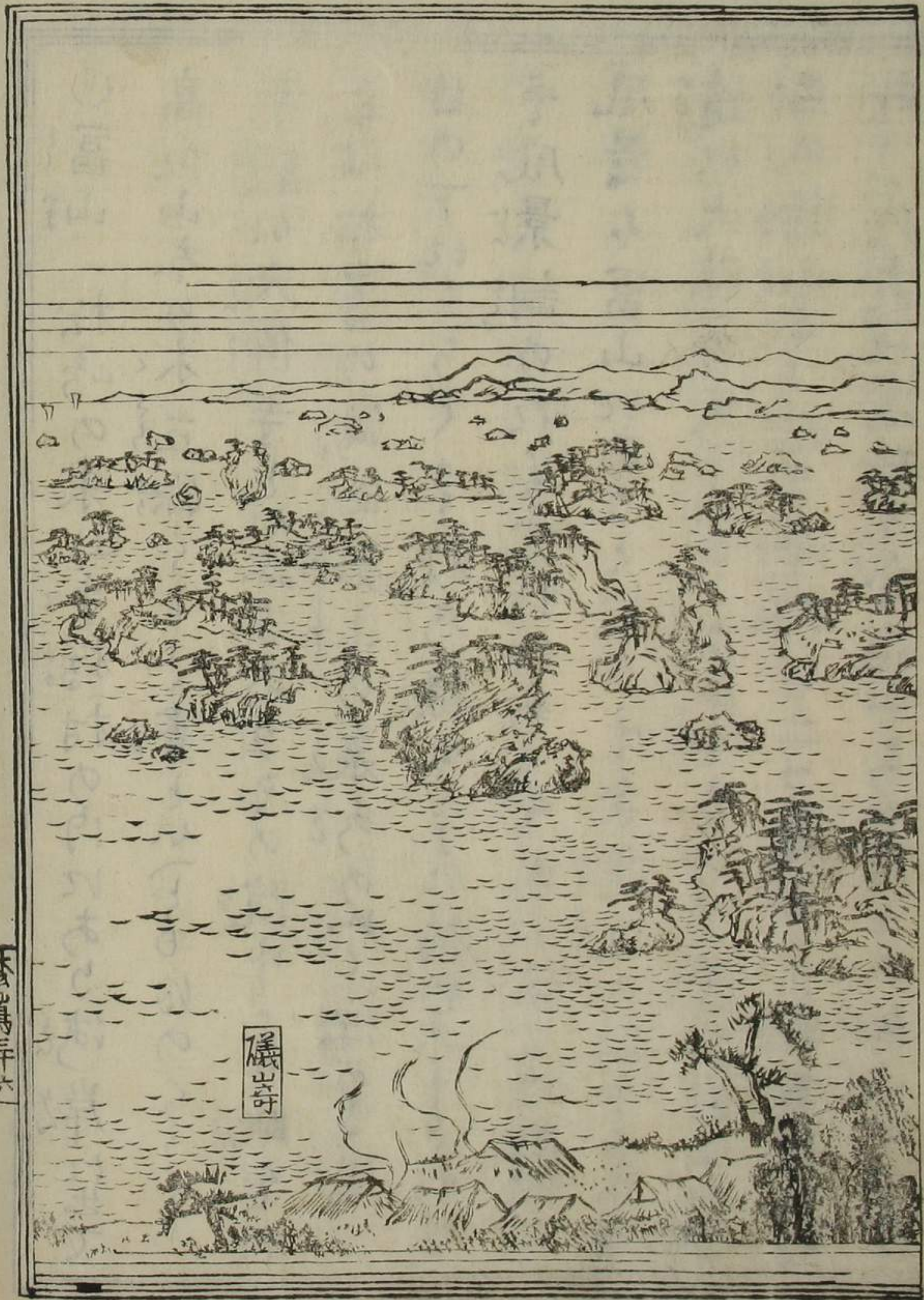
風景も富山のありとしりそ余遠近の眺をハ东南

遙に大海の天と一色なるをながく遠た右ハ相

馬の諸山より近き唐那の二ツ森まづ數百里の極

おつたたに遠たも金花山ちうたも日和山にいり

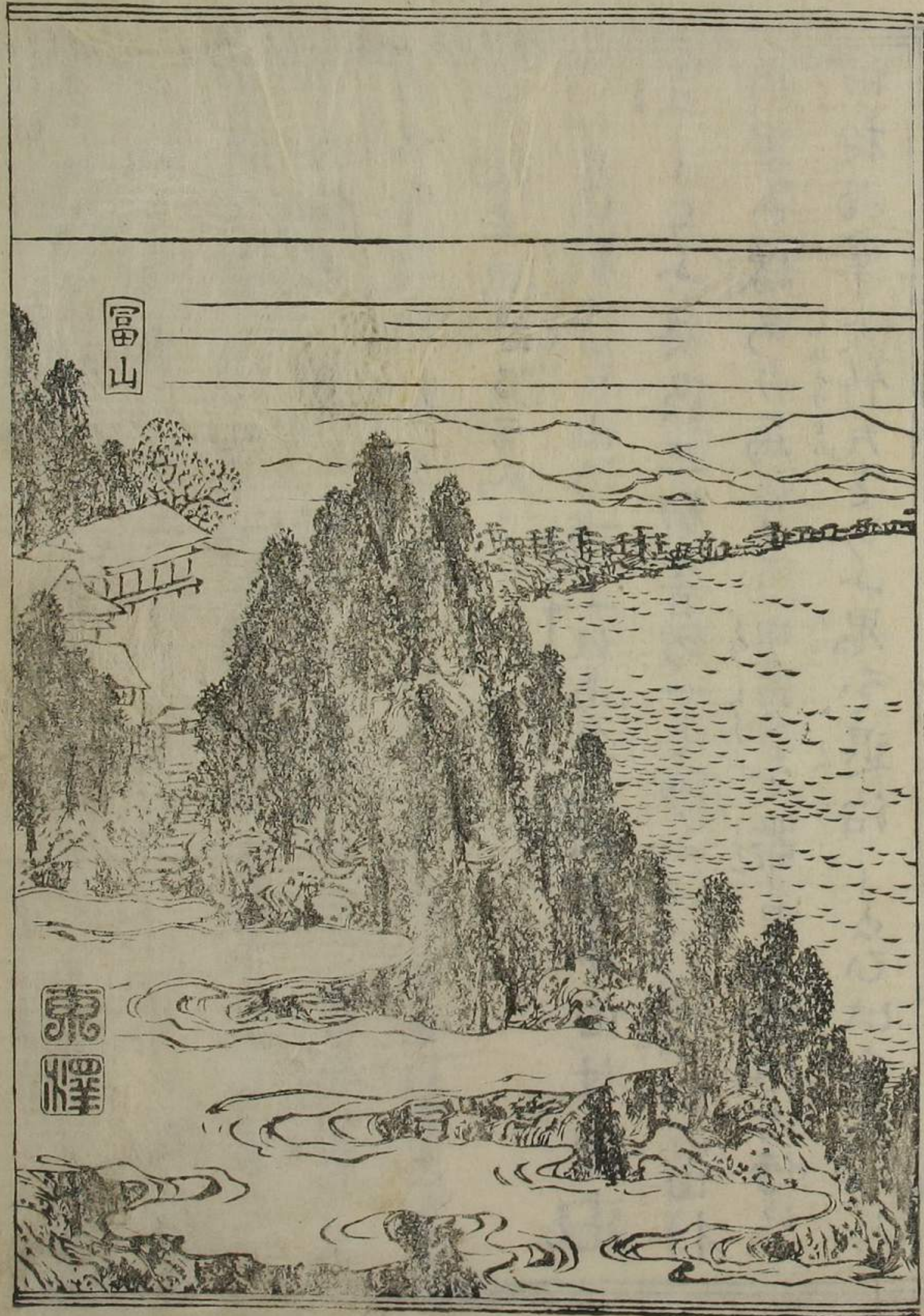




天  
馬  
平  
六

儀  
出  
奇







まぶ皆足をあげくふむべ〜とおもはる又漢舟のり  
あふも落葉の流るくぐく塩屋のけりち風にな  
びたろ雲とものいたぬびくさはいちんうこな〜  
○大仰寺 寛文中瑞岩寺洞水和尚開基瑞岩  
の末寺臨濟宗なりはさの屋上乃眺望せにまきなる  
奇絶上の述るがぬ〜

○富山観音 山の頂上にあり大同年中田村磨建  
立しぬふ奥に三観音の一とゆふ牧山 麓岳側は田村  
將軍の像あり馬にのり甲冑を帯せり俚俗の傳はハ  
田村お軍大竹丸とりぬ鬼を退治しぬひは愛いそ骨

松嶋三十八

をうつめく堂をたろぬふとゆふ

右富山も手樽村の内にく松岑の地に々あり松  
ども山上の眺を松嶋を一瞬に又たろ〜昔より  
松岑の景富山にありといひあ〜ハせるにゆりて聊  
た〜に附記を

文政三年庚辰四月 仙臺 鼓缶子述 東澤 圖

松嶋圖誌 終



文政四辛巳年七月

數學書院藏版

仙臺 西村治右衛門

京都

植村藤右衛門

江戸

須原茂兵衛

大阪

淺野彌兵衛

書肆

鼓缶子著述書目

近思錄摘說

十四卷

四書摘疏

近刻

四十卷

論語章旨

二卷

西銘考

一卷

朱子感興詩考

一卷

易學啟蒙摘說

五卷

太極圖說考

一卷

家禮圖

一卷

白鹿書院揭示講義

一卷

敬齋箴國字說

一卷

大學知止節國字說

一卷

大學誠意傳國字說

二卷

論語難章講義

四卷

中庸第二十五章講義一卷

詩識名

近刻 說六卷 圖六卷

十三卷

三綱發蒙

三卷

祭祀來格說講義

一卷

祭享說叢

一卷

以上漢文  
以下國字



五行易指南 既刻 十卷 推命書 既刻 三卷

今田考 一卷 仙臺方言 二卷

經世談初編 五卷 宗法說 一卷

理氣鄙言 既刻 一卷 松嶋圖誌 既刻 一卷

○訓點書目

小學 近思錄

四書 五經

楚辭



